知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 ［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

OCTOBER 2020 10

常滑と異世界のあいだ ～「泣きたい私は猫をかぶる」散歩

常滑と異世界のあいだ

「泣きたい私は猫をかぶる」散歩

今年、知多半島でもっとも話題を集めている映像作品といえば
「泣きたい私は猫をかぶる」をおいてほかにない。
美しい常滑の町と怪しい異世界を舞台に繰り広げられる
少女と少年と猫の物語、世代を問わず必見のアニメだ。

神明社の裏参道

ムゲや日之出が暮らす町は、こんなにも美しい。

登窯広場の「輝」

Netflixで好評配信中！

常滑が舞台のアニメーション作品「泣きたい私は猫をかぶる」（以下「泣き猫」）は、もうご覧になっただろうか。動画配信サービスNetflixで六月より全世界独占配信されて以来、各種メディアで大きく取り上げられ、本誌先月号でもロケ地探訪マップを掲載したので、常滑市民でなくてもよく御存知のことだろう。

W監督の一人は、常滑出身で常滑北高校（現常滑高校）の卒業生である柴山智隆さん。柴山さんはアニメーション制作会社スタジオコロリドに所属するクリエイターで、これが監督デビュー作となる。また、本作品のプロデューサーであるツインエンジン代表取締役の山本幸治さんも常滑出身で、制作に先立ち故郷の常滑を巡り歩いてみたという。監督の思い入れも強いのだろう、客観的に見ても独特の雰囲気をまとう常滑という町が実に魅力的に描かれており、心を揺さぶる青春ラブストーリーと、めくるめくファンタジーの世界を存分に引き立てている。

普段はアニメを見ない人にも、この機会にぜひ見ていただきたい作品だが、参考までにこの作品のストーリーを簡単に説明しておこう。

＊　＊　＊

主人公は中学二年生の女の子、笹木美代。学校ではいつも明るく陽気で、思いを寄せるクラスメイトの男の子、日之出賢人にアタックしている。しかし、相手にされなくても構わずにアピールを続け、なおかつ、やや度を過ぎたテンションが周囲の失笑を買うこともしばしばで、学校では無限大謎人間を略して「ムゲ」のあだ名で呼ばれている。周囲の目などどこ吹く風のようにふるまうが、実は人には打ち明けづらい家族の悩みも抱えている。

そんなムゲはある祭りの夜、神社の隅に屋台を出していた怪しい「お面屋」の猫店主に出会う。猫店主から手に入れたのは、被ると猫に変身できるというお面。ムゲはお面を被って子猫の姿になり、思いを寄せる日之出のもとへ足繁く通う。しかし、その猫店主がムゲにお面を授けたのには、ある企みがあってのことだった――。

＊　＊　＊

友達にも言えない悩みを抱えながら、全力で恋をする女の子。そして、それを受け止めきれない男の子。もどかしい現実世界と、逃避する幻想世界が表裏一体となって物語は進み、後半になると登場人物も視聴者も猫店主に取り憑かれるかのように、謎の「猫島」へと吸い込まれてゆく。

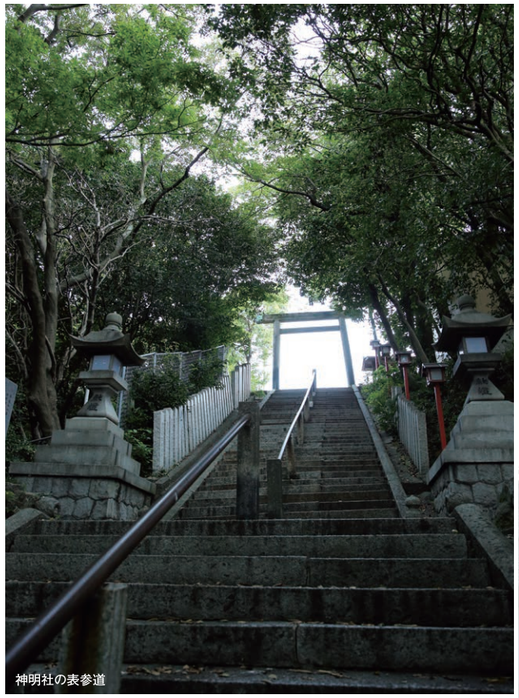
美しい風景に常滑アイテム

物語に引き込まれながらも、地元住民としては舞台の風景にも注目してしまうことだろう。前号のロケ地探訪マップで紹介したとおり、常滑市街の馴染み深い風景が次々に登場して、実に楽しい。

そのアニメ画になった常滑の風景の美しさには思わず唸らされる。特に、頻出する夕景と夜景の美しさ、空気感は素晴らしい。また、行方知れずになったムゲを友達が探すシーンでは雨の景色が出てくるが、雨の常滑を画面で見るというのも、なかなか新鮮な体験である。地元住民にとって「泣き猫」は、普段あまり気に留まらない風景の美しさに改めて気付かせてくれる作品だ。

風景の中に、観光ガイドなどにはあまり登場しないスポットや常滑焼の屋外作品が丁寧に描き込まれているのも、心をくすぐるポイントである。

例えば、日之出の自宅兼工房として登場する木造二階建ての味わい深い建物。これは、現在は「清風（せいふう）の陶房」という私設ミュージアムになっている。清風とは、戦前から昭和40年代にかけて数多くの陶彫作品（陶製の像）を制作した名工、柴山清風（1901〜1969）のこと。代表作は、知多四国霊場第六十五番の聖観音像、神明社参道の狛犬、小鈴谷の盛田命祺（めいき）像などで、清風


神明社の表参道

参道に並ぶ灯籠

登窯広場の「時空」

「泣き猫」が教えてくれる、あなたの知らない常滑。

瀬木の天王祭の笹神輿

手水舎の陶製人形

境内の遥拝所

の陶房はかつて、それらの作品が作られた自宅兼工房だった。実は清風は柴山監督の曾祖父にあたる人物で、柴山監督も幼少時にここで暮らしていたという。

物語前半の印象的なシーンでは、登窯広場に屋外展示されている二つの作品が登場する。ひとつは、ムゲと日之出が身を寄せてじゃれあっていた、大きな青い陶製の四本柱。もうひとつは、ムゲが猫店主に「人間の顔をくれ」と迫られて逃げ出した場面に出てきたカラフルなモザイクの陶壁である。

これらは登窯広場が整備された平成7年(1995)に、現代常滑焼の代表的な作家が制作した大型の作品だ。前者は柴田正明さんの「時空」で、日之出とムゲがそうしていたように柱の間に入ることができ、内側から見るとまた違った味わいが楽しめる作品である。後者は杉江淳平さんの「輝」。間近で見ると無数の四角錐から成っており、右面と左面で色を塗り分けることで、観る方向によって異なる模様が浮かび上がる仕掛け。制作から二十年以上を経て近年はあまり顧みられていない感もあったが、これを機に再び注目されそうだ。

物語の後半に差し掛かると、猫になったムゲが猫にしか見えない道を辿って「猫島」への入口へと導かれるシーンがある。その中のワンカットに、神明社の裏参道の階段を登り切ったところにある手水舎(ちょうずしゃ)が描かれているのだが、その手水舎の水の吐き出し口が「鯉に乗った小僧」であることに気付いただろうか。一風変わったデザインなのでアニメーターの創作かと一瞬思うが、やはりこれも実物を忠実に写し取った陶製品だ。かつて常滑駅の近くにあったノベルティメーカーの鈴村建陶社が、昭和47年(1972)に寄進したもので、どこか物語の世界観にも通じるような、ちょうとミステリアスな一品である。

このように「泣き猫」は、ストーリーとは関係ない部分でも大いに楽しませてくれる。

神明社は異界への入口

その神明社は常滑の市街中心部にある神社で、「泣き猫」では極めて重要な場所として描かれている。

作品中ではシーンが前後しているが、夏祭りの日、屋台が並ぶ境内でムゲが実母と言い争いをし、一人喧嘩を逃れて神社の森の奥へ歩いて行ったところで、猫店主と出会う。ムゲはお面を着けて、猫に変身。初めての変身に驚いてへたりこんでいると、電話で母と言い争いをして落ち込んでいた日之出が偶然そこに現れる。

ここで出てくる夏祭りは、毎年七月中旬に執り行われる瀬木(せぎ)(常滑市中心部の地区名)の天王祭だ。そのルーツは、津島市にある全国の津島神社の総本社、津島神社の尾張津島天王祭。「尾張津島天王祭の車楽舟(だんじりぶね)行事」として国の重要無形民俗文化財に指定され、ユネスコ無形文化遺産の「山・鉾・屋台行事」にも選定されている。この祭りでは、疫病神を封じ込めた葦(あし)を川に流す「神葭(みよし)流し神事」が古来行われている。その昔、川から伊勢湾へと流れ出てた葦が常滑の浜に漂着したことがきっかけで、常滑に天王信仰が定着し、〝本家〟に倣って祭りも始まったとされている。

瀬木の天王祭では、大きな竹にたくさんの提灯を吊り下げた「笹神輿」を担いで町を練り歩き、神明社の表参道の階段下に設けられた仮宮に参拝する笹神輿行列が行われる。これは尾張津島天王祭最大の見どころ、巻藁船(まきわらぶね)(提灯で飾られた船)を模したもの。お囃子をバックに無数の提灯がゆらめく様は、アニメでも情緒たっぷりに描かれているが、その一方で物語のクライマックスの舞台「猫島」の町並みの雰囲気と重なっており、伏線のようでもある。古くから続く祭りには、ファンタジーの世界に通じる神秘めいたところがあるものだ。

神明社の立地も、改めて考えてみると少し不思議かもしれない。町の中にぽつんとそびえる小さな山全体が神域になっており、土管坂休憩所のあたりから眺めると海に浮かぶ小島のようにも見える。なんとなく「猫島」を彷彿させるではないか。山上の社殿へは、表参道(南側)の石段と裏参道(北側)の石段があり、どちらも鬱蒼とした木立の中に吸い込まれていくようで、少し怪しさもある。まるで異世界へ続く階段のように。

物語では、神社の隅にあると思しき見晴らしのよいテラス状の場所から、沖合の異次元に浮かぶ「猫島」への道が出現する。実際には木立に遮られ境内から町と海を眺めることはできないが、その場所には、伊勢神宮や金刀比羅宮などの遥拝所が設けられている。遥拝所とは、遠方にある神社の方角に向かって参拝する場所のこと。言ってみれば、神明社から彼の地へと見えない一本道が通じているようなもので、物語とぴったり重なるではないか。

アニメファンは、作品の舞台になった場所を「聖地」、それらを訪ね歩くことを「聖地巡礼」と呼ぶ。聖地巡礼の際にはぜひ神明社にも参拝して、異世界につながる不思議な空気を感じてほしい。

清風の陶房
常滑市瀬木町1-75
10:00〜14:30、
土・日・月曜のみ開館
080-3622-9399
(要事前連絡)

泣きたい私は猫をかぶる

監督／佐藤順一、柴山智隆　　脚本／岡田麿里
声　／志田未来（笹木美代・太郎）、花江夏樹（日之出賢人）、
　　山寺宏一（猫店主）ほか
企画／ツインエンジン　　制作／スタジオコロリド
製作／「泣きたい私は猫をかぶる」製作委員会

© 2020「泣きたい私は猫をかぶる」製作委員会

Netflix 加入方法

Netflixは、ホームページから会員登録することにより視聴できます。詳細は「Netflix」で検索

■料金／月額880円（税込）～（プランにより異なる）

CCNCのインターネットサービスをご利用いただいている方はCCNC経由でお申し込みできます。詳しくは「CCNC Netflix」で検索

「泣き猫」グッズが購入できる場所

■常滑市陶磁器会館
9:00～17:00、無休／0569-35-2033

■常滑市観光プラザ
（常滑駅構内）
9:00～17:30、無休／0569-34-8888

■土管坂休憩所
9:30～16:30、
月曜休（祝日の場合は翌日）
0569-34-8888（常滑市観光協会）

こちらもおすすめ 知多半島が舞台 の映像作品

©2008 映画「20世紀少年」製作委員会

20世紀少年 -第1章-終わりの始まり　-第2章-最後の希望　-最終章-僕らの旗

多くのヒット作を生み出し続けている浦沢直樹の漫画が原作の映画。主人公のケンジが少年時代に描いた「よげんの書」の内容が、20世紀末に謎の人物「ともだち」によって現実のものとなり、世界は滅亡の危機に直面する。ケンヂと仲間たちは「ともだち」の正体を突き止め、世界を救うことができるのか。

この作品は「昭和」がキーワードのひとつ。昭和の風情が残る町並みを探していた堤幸彦監督が常滑を気に入り、やきもの散歩道を中心に常滑市内でロケが行われた。撮影場所には案内板も設置されている。

監督／堤幸彦　　脚本／長崎尚志、浦沢直樹
原作／浦沢直樹「20世紀少年」「21世紀少年」（小学館ビッグコミックスピリッツ刊）
出演／唐沢寿明、豊川悦司、常盤貴子、香川照之ほか　　公開／2008、2009

DVD & Blu-ray販売中　発売／パップ

©2018 映画「世界でいちばん長い写真」製作委員会

世界でいちばん長い写真

実話をもとにした青春小説が原作の映画。主人公の内藤宏伸は写真部に所属する高校生。夏休みのある日、長い写真が撮れるよう改造された大きなパノラマカメラにリサイクルショップで出会う。衝撃を受けた宏伸は、撮影したい景色を探して回り、ついに最高の場所に辿り着いた。

ロケが行われたのは南知多町と美浜町。宏伸が撮ったひまわりのパノラマ写真は、南知多町豊丘地区にある観光農園花ひろば。また、美浜町奥田地区の日本福祉大学付属高校、若松ポートサイドビーチ、奥田の写真館、上野間地区なども登場する。

監督・脚本／草野翔吾　　原作／誉田哲也「世界でいちばん長い写真」（光文社文庫刊）
出演／高杉真宙、武田梨奈、松本穂香、水野勝ほか　　公開／2018

Netflixで配信中

1979 はじまりの物語　～はんだ山車まつり誕生秘話～

半田市のケーブルテレビ局CACが制作し、CCNCほか県内外のケーブルテレビ局で放映中の連続ドラマ。五年に一度、半田市内の山車31輌が一堂に会する「はんだ山車まつり」が、多くの人たちの情熱と努力でさまざまな難問を乗り越え、ついに実現するまでをドラマチックに描いている。

ロケ地はもちろん半田市内。出演者には半田市出身の平野泰新と原田篤が名を連ねる。また、武豊町民劇団TAKE TO YOU代表の中山真人さんが、はんだ山車まつり実行委員会の主要メンバーという重要な役で出演している。

監督・脚本／作道雄
出演／宮地真緒、平野泰新（MAG!C☆PRINCE）、原田篤、中村優一（友情出演）

CCNCコミュニティチャンネル地デジ111chの15:15～、23:30～他にて放送中